

中国から見た白川文字学——白冰著『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』¹について

張 莉

はじめに

白冰氏の『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』の紹介及び考察・評価を日本で紹介させていただく機会に恵まれた。インターネットでこの本の存在を知り、中国帰国の際に書店で買い求めたことがきっかけである。その後立命館大学の高島敏夫先生との会話の中で白冰氏のこと話にのぼり、中国内における白川靜博士の認知度及びその精度を知る上でまたとない資料であるということに教示を得た。そのような経験を得たことがこの小論を書くきっかけになったのである。白川博士の学説は難解であり、現在の私にもわからないことが多い。その研究範囲の広さや考察の深さ・斬新さは一人の人間技と思えない巨大な体系である。白冰氏が白川博士のこのような難解で膨大な資料に取り組んだのは、同じ中国人として尊敬の念を禁じえない。多大な時間を費やしたであろうし、ましてや日本語の著書であるから、その研究の心労は想像に難くない。しかしながら白冰氏が白川博士の学説の長所・短所を指摘したように、私も白冰氏の解釈の是非

を問わなければならない。その上で白川博士の学説が正確に中国に伝わっているかどうかを日本の皆様に開示しなければならない。白冰氏のように先行の学者は苦労が多いわりには研究の辛苦が理解されず批判を受けやすいが、彼の業績を正しく評価することは今後の中国における白川博士の学説の普及に大いに役立つものである。そういった思いを抱きながら、本論を書き進めていきたい。

この著書について最初に感じることは、題名の『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』には金文学の著作にのみ関心があり、甲骨文のことが含まれていないような印象があることである。その理由を白冰氏が書いていないが、以下のように考えられる。

- ①白冰氏は白川博士の業績の中で『金文通釋』を最も評価しており、彼の論文業績を見た場合にも金文に関するものが多い。
- ②金文を第一資料とし、甲骨文はそれを解釈するための先行資料として位置づけているような書きぶりを感じる。
- ③白川博士の載書や神梯などの系列文字に対してはある範囲では容認するが、その範囲以外では容認しないという白冰氏の基本的な考え

方がある。

④甲骨文字はまだわかっていない部分が多く、不明は不明として捉える白冰氏の考え方が意識の根底にあるように思われる。当小論の叙述についてもこの点ご注意いただきたい。

また「白川静金文學著作的成就與疏失」という副題の「疏失」という語について一言述べておきたい。「疏失」は直訳すれば、手落ち・粗相・粗忽の意味であり、間違ひ・誤りをいうなら「錯誤」となる。白冰氏が「疏失」という語を使ったのは、白川博士に対して失礼に当たらぬよう敢えて使ったのであろう。「錯誤」では激論を戦わすようなイメージになりただけでない。さりとてどのような言葉を使えば白川博士に失礼にならないか、中国人であっても難しいところである。白冰氏は所々で白川博士の説に対して自説もしくは文字学者の説を唱えているが、著書全体を通して白川博士に対する尊敬の念で貫かれていくことを明示しておきたい。

1. 白冰氏の経歴

〈経歴〉

1961年6月生まれ、男性、山東省聊城市の人。

1984年6月 鄭州大学歴史学専攻卒、その後同大学の助手・講師を勤めた。

1996年9月 寧夏大学漢語言語学修士課程入学

1997年9月 日本の島根大学に留学し塩見邦彦教授(中国文学)

に師事。

1998年10月 帰国し寧夏大学漢語言語学修士課程で再び学業を重ねる。

1999年6月 文学修士学位取得

1999年7月 五邑大学(廣東省江門市)中国言語文学部に勤める。

2002年 中文副教授となる。

2003年 中山大学(廣東省廣州市)大学院漢語文字学専攻

博士課程に入学、張振林教授に師事。

2006年 博士号取得

2008年 廣東技術師範学院民族学院 教授

参考までに白冰氏が日本に留学した際に師事した塩見邦彦氏の経歴を記す。

〈塩見邦彦氏経歴〉

1941年、京都府生まれ。名古屋大学大学院文学研究科(博士課程)

単位取得退学。弘前大学、島根大学を経て、鳥取大学地域学部教授、

2006年3月定年退職。著書『朱子語類口語語彙索引』(1992・

中文出版社刊)、『唐詩口語の研究』(1995・中国書店刊)、『中国

の「紀年」詩』(2006・白帝社刊)等

2. 白冰氏の論文・著書について

①『漢語大詞典』詞語溯源小補五邑大學學報(2002. 2. 1)

②從『説文』與『廣韻』詞語訓詁看東漢至北宋的語言發展 五邑大學

學報(2002. 8. 1)

③ 宋元兩「語言詞典」漏收量詞考補 河南師範大學學報(社)(2002. 5. 10)

5. 10)

④ 『助學辨略』中的宋元口語語詞舉隅 辭書研究(集)(2002. 3. 1)

⑤ 古文字“家”字形、義及“字文化”五邑大學學報(2003. 5. 5)

⑥ 白川靜『金文的世界』翻譯與校補(一) 五邑大學學報(2004. 3. 9)

3. 9)

⑦ 白川靜『金文學史』的漢語文字學成就 江西社會科學(2004. 11. 1)

11. 1)

⑧ 試論『字統』的特點與創見 辭書研究(核心)(2005. 8. 1)

⑨ 中文工具書的使用(教材, 25萬字) 上海古籍出版社(2005. 8. 1)

⑩ 春秋青銅器器名方言考 語言研究(核心)(2005. 6. 1)

⑪ 白川靜『金文之世界』校補(選輯) 古漢語研究(核心)(2005. 9. 1)

9. 1)

⑫ 青銅器賂器功能考辨 五邑大學學報(2005. 5. 1)

⑬ 論金文刑罰系列字 漢字文化(2006. 4. 25)

⑭ 『青銅器銘文研究——白川靜金文學著作的成就與疏失』 學林出版社(2007. 6)

(2007. 6)

3. 『青銅器銘文研究——白川靜金文學著作的成就與疏失』の目次

目次は以下の通りである。

目録

第一章 引論

第二章 『金文通釋』

第三章 『金文世界』

第四章 『說文新義』

第五章 『字統』

第六章 與軍禮、刑罰、祭梟有關諸字

第七章 與鳥占、神梯、盟誓有關諸字

第八章 從戈矢、人儿、口曰等偏旁諸字

第九章 金文詞類、短句、句子之訓詁

第十章 金文研究的方法及其運用

4. 「引論」(序論) について

「内容提要」において、この著書は2006年博士学位論文を修正したものであるという。更に白川博士の著作を中国語に翻訳し、博士の学術思想と金文学の成果を総括し、研究することは重要な意義があると述べている。

白冰氏は第一章 引論(序論) に中で次のように述べる。

「筆者對白川靜金文學的研究，分兩部進行：第一步是把日文原著譯成中文，從中總結出白川靜研究金文方面與眾不同的成果，第二步對這些成果進行梳理、分析與評論，錯了的要糾正，對了的要肯定，還要作出一個比較公正的評價。這些工作都是對金文資料以及相關的古文字資料研究的基礎之上進行的，所以有一定的難度」²⁾。白冰氏が白川靜博士の学問を総括的に論じた著書である『青銅器銘文研究』を書いた理由がこの中に端的に表われている。第一は、白川博士の日本語の原著を

中国語に翻訳し、博士の金文研究の中で他の学者と異なった成果を総合的に論ずることである。第二は、このような成果に対して整理し分析評価して間違ったところは修正し、正しいところは肯定し、公正な評価を作成することである。これらの仕事は金文資料及び関連する古文字資料の研究の基礎の上に立って行なっていくもので、相当な困難を伴う。金文の字形・音韻・訓詁・文法等の研究、また金文の分類すなわち祭祀・服飾・宮室・貨幣・曆法・人物・戦争・賞賜・職官の研究を金文解釈の課題として挙げている。これらの総合的な角度から考察しなければ、白川博士の論述は理解できないとしている。

白冰氏の白川博士への評価は下記の文中に示されている。

「……他（白川博士：筆者記す）可以對金文做出符合自己思想的種種研究，這些研究，有的可能符合金文的實際，有的也可能與金文的實際不相符合，甚至與金文的實際南轅北轍」³⁾彼は白川博士の金文解釈についてあるものは金文の実際の内容と合致し、あるものは合致していないと述べる。白冰氏が目指したものは、古文字学者の従来の研究を参考にし、あるときは自分の意見も交えて、白川博士の金文学研究の客観的評価を述べることであった。

引論は次のように締めくくられている。「幾年來，我一直是懷著敬仰的心情閱讀、翻譯白川靜先生的著作，從中受到很多教益。我生來拙笨，讀書不多，對金文的了解淺薄，文中不當的斷語、不當的評語肯定不免，祈望白川靜先生指正，祈望古文字學界的前輩和學友指正」⁴⁾白川博士が亡くなられたのは2006年10月であり、「青銅器銘文研究」が世に出たのは2007年6月であった。残念ながら白川博士は白冰

氏の著書に目を通される機会がなかった。

5. 白冰氏が「青銅器銘文研究」を書いた目的について

(1) 白冰氏より見た白川博士の中国文字学界に対する影響について「引論第2節3白川靜在中國學術界的影響」⁵⁾において白冰氏は次のように述べる。以下要約する。

白冰氏は西周銅器銘文に対する系統的研究を時系列に列挙し簡潔に評価している。

①「兩周金文辭大系」郭沫若著（1934）……162器。「是大」
②「西周銅器斷代」陳夢家著（1955）……凡98器。「重在分期斷代」

③「金文通釋」白川靜著（1962）……198器。「通釋非集釋」「是白川靜的獨創」

④「西周青銅器銘文分代史徵」唐蘭著（1986）……290器。「用在證史」

⑤「商周青銅器銘文選」卷三馬承源主編（1988）……512器。「主要是選注」

これらの著書の中で白冰氏は白川博士の『金文通釋』を「就西周金文研究而言，與中國學者相比，白川靜是比較突出的一位」と絶賛している。その理由として白川博士の字釋は従来の学者の説のみならず、博士自らの説を多く提示しており、そのため歴史事実に関しても新発見が見られることを挙げている。しかしながら日本語で書かれているため、中国の学者にとっては読解が容易ではない。引用者は、否定し

たり肯定したりしながら、短い引用に終始している。

更に白冰氏は続けて言う。「日中の学者の中では、白川静の金文研究は成功していると言うべきであろう。銘文の解釈、断代分期、文字考釈及び金文によって考察された歴史には一貫した解釈の成果が見られる。金文を研究する多くの学者の中で、白川静は重要な人物である。彼が金文研究でなした豊富な成果により、国際漢学界の巨匠としての学術的地位を確立した。」⁶⁾

(2) 「青銅器銘文研究」を書く意義について

「引論第3節 選題意義」⁷⁾において白冰氏は次のように述べる。白川博士の主な学術成果について次の4点を挙げている。以下要約する。

①白川博士は孫詒讓・羅振玉・王國維・郭沫若・唐蘭・楊樹達・于省吾・容庚・商承柞・徐中舒・吳其昌・陳夢家などの研究成果を総括し、加藤常賢氏著『漢字の起源』の学術成果を参考にし、ひろく多くの長所を採った。白川博士の金文学の成果は上述の諸家に匹敵する。(※白川博士は加藤常賢氏に対しては「釈文」に見るように、実際は批判の対象とすることが多かった。)

②白川博士は金文の字形分析・声訓運用のみならず金文の語義を探索する際に優れた諸家の正しい意見で取るべきものは必ず収録している。またなお定見を得ていないものに対しては自分の見方を明確に提出する。疑わしい問題については慎重な態度で臨む。

③白川博士は字形を分析し、字義を解釈し、まず金文あるいは甲骨文の例・考古資料・文献資料を引いて証明する。多方面において比類のない優れた見解を示している。

④白川博士の金文学の成果は、古文字研究の探究・商周社会の歴史の考察だけではなく、古代文献の正義解釈や字書・辞書の編纂などその意義は非常に大きい。

(3) 「青銅器銘文研究」の研究範囲と方法について

「引論第4節 材料範囲及研究方法」において以下の如く述べられている。

(1) 「材料範囲(研究範囲)」⁸⁾

「研究範囲について以下要約する。

この著書の主要な研究対象は『金文通釋』『金文世界』『說文新義』『字統』の四著である。前二者は金文の専門的著作であり、銅器銘文に対する研究と金文資料を用いた社会歴史の研究成果である。後二者は金文の形、音、義の研究成果である。白川博士の研究の結論と最新成果との相違点を比較し、金文の字形・字義研究の独創的な見識を概観したいと思う。

(2) 「研究方法」⁹⁾

研究方法について以下要約する。

①分類統計、重点課題採取方法の採用。金文の字形分析と語義の訓詁に重点を置き、白川博士の独創的な新しい見識、或いは見解が不確かな誤りの例を取り上げる。

②単独の文字の分析、具体的な考証の方法の採用。白川博士の新しい見識・独創的な認識を重視し、不確かな誤りの例を明らかにする。

③比較異同、客観的評価方法の採用。白川博士の金文学とそれに前後する金文学の研究を比較し、時には甲骨文字や木簡・帛書文字を参

考にする。また白川博士の金文学と同時期の金文学を比較研究し、博士の独創的な新しい例について探求する。

論旨が重複してわかりにくいのが、要は白川博士の新しい見識に対して他の学者の説と比較して正しい評価を下すという趣旨であろう。

(4) 「青銅器銘文研究」の研究目的と課題・困難について

「引論第5節 課題研究目的和難点」において次のように述べられている。

「研究目的」¹⁰を以下要約する。

① 白川博士の銘文考釋、断代分期、金文学史、金文系列文字などを具体的に総括する。

② 金文研究の個別な漏れや誤りをはっきりさせたいし、同時に先人の努力によって解決した問題、あるいはまた未解決の難問を提示し、より深く研究したい。

③ 白川博士の金文字形の分析、金文の語義の訓詁、銘文を解説する新しい方法についてまとめる。

「課題研究的難点」¹¹を以下要約する。

白川静先生の日本語原著を閲読し翻訳するのに、2年余りの時間を費やした。中国語との言語系統の違いから、語・熟語・句の対訳は時として困難であり、何度も手直ししてやっと通じるようになった。白川博士の言い回しには文語と現代語が混じっており、時には念入りに吟味する必要がある。また白川博士の表現によく見られるのは、大概……吧（おおむね……でしよう） 恐怕……吧（恐らく……でしよう）の類であり、推測の語気であり、断定のようでもあるしそうでな

いようでもあるが、前後の文意を細かく検討した後、結論を出すのである。白川博士の本意を理解するのは予想していた以上に難しかった。

6. 白冰氏の『金文通釋』『金文の世界』『說文新義』『字統』についての評価

ここでは『青銅器銘文研究 白川静金文学著作的成就与疏失』において研究対象とした『金文通釋』『金文の世界』『說文新義』『字統』の四著に対する白冰氏の説明・評価についてその概要を記す。

(1) 『金文通釋』について

以下要約する。

「第2節《金文通釋》的成就」¹²において「文字學史」「古文字學」「銅器斷代」の3つの方面から評価をしている。「古文字學」の項には白川博士の字義解釈に対する自分の意見を述べている。「銅器斷代」の項には各々の青銅器について白川博士、唐蘭、馬承源、王世民、劉啓益の5人の断代の対比表を詳しく載せている。

「第3節《金文通釋》的評述」¹³で白冰氏は次のように述べている。

最初に諸家の説を多く採用し、考釈している。彼は各家の長所を集め、それらの観点に対して評述し、実際の学術的観点と符合するものを重視し、過分の評価をせず過ちを正し、それらの論の是非を論じた。その次に原資料をもって研究の基本とする。白川静の研究は、おおげさな表現を避け、根拠のない論は極めて少なく、できるだけ根拠のある言葉を求め、第一資料の収集に心掛けて研究の立脚点・出发点としている。第三に、『金文通釋』の「通」は独創的な見解を意味している。多くの著作の中で、白川静は字を考察して義を解釈し、ならびに関連

する歴史を解釈する。中には新しい発見や新しい観点も多く存する。

今なお金文を研究する学者が『金文通釋』を参考にしている。しかしながらこの著述は日本語で著されたものであり、中国の学者には使用しにくい。『金文通釋』を引用するものは、あるものは肯定しあるものは否定し、多い時は一段・半段の引用であり、少ない時は二、三言の言葉であったりして、全面的に引用しているものはない。

白冰氏は『金文通釋』の中に見える次の15字について分析と評価を述べている。1. 考 2. 爵 3. 彝 4. 易 5. 宀 6. 粟 7. 禡 8. 爰 9. 禘 10. 統 11. 壘 12. 鵬 13. 夷 14. 厶 15. 彌である。このうち「禡」「易」「禘」については、後ほど「7. 白川博士の字義解釈例に対する白冰氏の分析と評価」の項に取り上げて説明したい。

(2) 『金文の世界』について

白冰氏によると、2004年に『金文世界』を中国語に全訳し、張振林師に査読いただいたとある。2004年といえば白冰氏は中山大學大学院漢語文字学専攻博士課程に在籍し、張振林教授に師事されていた時である。したがって『金文の世界』の評述に際して、次のように述べている。「本章の評論也只不過是我跟隨前輩學習古文字過程中所見及點滴體會而已、難免存在不當、目的只想給一般讀者閱讀《金文世界》時以參考、同時也爲使這部金文著作本身更加完善一些、決無任何挑剔之意。」¹³⁾ 白冰氏は自身の金文に対する解釈がまだ未熟であるのに、そのような状態でなぜこの本を書いたのか、その理由を述べる。金文というまだ未開発な学問には確たる指標もないので、たとえ評述

が完璧でなくても『金文世界』の読者の参考になると白冰氏は考えたのであろう。白冰氏は翻訳にあたって『金文の世界』収録の130余の銅器銘文に注釈をほどこしたが、原資料の仔細な分析を基本とし一般的な説と諸学者の意見を参考にすることを旨とした。

白冰氏は「一、金文釋文、斷句或釋義的問題」として『金文の世界』著録の40器の金文にわたって断代の相違、銘文の読みの相違など中国の学者の説との比較検討により述べている。また「二、歴史人物、事件或地名的問題」について白川博士との解釈との相違を同様の方法で述べている。

(3) 『説文新義』について

以下要約する。

「第3節『説文新義』的評述」¹⁴⁾の中で次のように述べている。

白冰氏は『説文新義』の33文字に評述を行っている。

33文字とは次の如くである。

名・君・周・商・言・童・罍・改(改)・皆(召)・魯・者・難・斟・茲・守・筮・乃・今・畚・良・杓・南・泉・客・勿・乍・朕・庶・忌・間・姻・威・我

上記の16例(下線の文字)は白川静の新しい見識により独自に解釈されたものである。その中には字形分析に重点を置くものがあり、字義の解釈に重点を置くものもあり、大部分は字形分析と字義の解釈とが結びついている。字形分析も字義解釈も、新しい見方であるが、具体性が十分でないもの・全面的な分析や解釈が十分でないものが含まれている。例えば、君・言・恥・魯・葍等である。「口」載書説も新し

い認識であるが適切であるかどうかは、なお検討されなければならぬ。このうち「名」「言」「魯」「客」については、後ほど「7. 白川博士の字義解釈例に対する白氷氏の分析と評価」の項に取り上げて説明したい。

(4) 『字統』について

以下要約する。白氷氏はほとんど『字統』の「字統の編集について」の中から抜粋して翻訳している。

① 「字統的形訓特點」⁽¹⁶⁾について

白川博士は字形を正確に理解するために、必ず字をひとつの系列に分類し、「系列字」を形成する。例えば『字統』は「辛」を分析し、墨黥を行なうための細身の刀に象るものとしている。入れ墨のとき使う器具はすなわち「章」であり、「辛」と比べて、紋様や飾りを増やしたものである。口の形は神に対して盟誓する時に用いられ、盟誓の文辞を収容する器である。口の上に辛を加えるものは「言」であり、「言」はすなわち盟誓の時に話す言葉である。「音」は盟誓の「言」に対する神霊の感応をあらわす。…これらは一系列の字である。

② 「字統的音訓特點」⁽¹⁷⁾について

白川博士の『字統』は中国の音韻学の研究成果に基づく。必要なきには声韻に頼り、声韻を手がかりとして字義を探求する。例えば、「由」を声とする字は油、柚、宙、冑、迪、笛、舳、軸、岫、袖等。「由」と「宙」はおおよそ同源の字である。「宙」はひょうたんの形であり、ひょうたんの果実を搾って油となり、残留する果殻内部の空虚を「宙」という。果殻内部が空になって軽くなり自由に運動できるものを「軸」

字に作る。

③ 「字統的義訓特點」⁽¹⁸⁾について

文字は形により義を示し、同系列の字は意義の関連を保持している。白川博士は古文字の表現する形態により、載書・刑罰・軍礼・巫祝・神梯・聖域・紋身・盟誓・農耕・天象・医術・歌謡等多系列を分類し、同系列の字は意義が相通じていると認識している。このように古字を系列に区分する理解の仕方は、文字の体系的な性質を明らかにするものである。系列字の解説中、中国の学者とは異なる認識が多くあり、甲骨文の用例や金文の用例によって説得力のある新しい観点を有している。これらの新しい観点は我々がかつて考えもしなかったことである。

このうち「告」「史」「事」「使」等の載書関連の文字、「鳴」「唯」「雖」等の「口」を含まない「鳥」「佳」関連の文字、「阜」「卩」関連の文字について「7. 白川博士の字義解釈例に対する白氷氏の分析と評価」の項に取り上げて説明したい。日本における白川博士の『字統』の評価は、特に甲骨文・金文に習熟していない一般の人に対して漢字の原義をわかりやすく叙述したことにあると思われる。あいうえお順の語の配列は便利であり、各々の文字の字義についても『説文新義』よりもコンパクトに説明されている。しかしながらこの配列は日本人に対するものであり、中国人にとってはややわかりにくい。また白氷氏が白川文字学を『字統』よりとらえようとする試みは、各文字に対する説明の量が少ないので十分とはいえない。このことは次章の『字統』から取り上げた載書関連の文字に対する白氷氏の解釈を通じて明らか

にしたい。

7. 白川博士の字義解釈例に対する白氷氏の分析と評価

白氷氏による白川博士の各文字の字義評価を見ると、白川博士に対する白氷氏の考えの相違点が見えてくる。以下、白氷氏の解釈についての私の考えも交えて記述したいと思う。

(1)「𠄎」を含む載書関連の甲骨文字・金文についての白氷氏の評価
①『字統』「告」「史」「事」「使」の白氷氏の解釈について

白氷氏は「第4節《字統》的義訓特點⁽¹⁹⁾」という項の中で、白川博士の最も代表的な字義解釈として知られる「告」「史」「事」「使」について3頁に亘る叙述をしている。

『字統』「告」について白氷氏は「告爲象形字。象把祝禱之器口懸掛於木之小枝之形^①。呈獻祝禱之器懸掛於木之小枝之形、爲祈告神靈的意義。……口形之字作祝禱之器形^②、口中放入祝詞、懸掛於小枝呈獻給神靈。告的初義爲告祭、即祈告先祖……」⁽²⁰⁾（波線①②は筆者記す）と翻訳している。※この中で波線①の『字統』の原文は「木の小枝に祝禱を取る器の𠄎を懸ける形^①」であり波線②は「口形の字も𠄎、祝禱の器の形⁽²²⁾」とあり、いずれも𠄎という甲骨文が記されておらず、読者は楷書の「告」と「口」を念頭に考えることが想定され、この点で誤解を招きやすい。

白氷氏は、いくつかの甲骨文によって例証された白川博士の「告」の字義を「一種新的認識⁽²³⁾」とし、「告」の基本義が告祭であることを

諸説の中の一説と位置づけている。また王や上のものに告げるといふ義は金文にその例が多く、神に告げる意の「告」の引伸義であるとしている。ここで疑問に思うことは、白氷氏は白川博士の「𠄎」についての認識を肯定もせず否定もしない立場をとっていることである。こういった白氷氏の白川文字学への字義解釈をふまえ、「告」と同様に𠄎の系列文字「史」「事」「使」についての白氷氏の解釈を考察してみたい。

白氷氏は「史（甲骨文字⁽²⁴⁾）」字の上部「𠄎」が何であるか、について何人かの文字学者の解釈を引く。徐中舒の「象捕獸之干形」、馬叙伦の「象筆形」、王國維の「盛簡策之器」、姚孝遂の「象出使者所持之旌節」、亦未可知、故存疑待考」、白川博士の「𠄎像祝禱之器懸掛於木之形⁽²⁴⁾」などである。白川博士の『字統』では「史」に甲骨文字「𠄎」「𠄎」を記載しているが、白氷氏は「𠄎」を記している。「𠄎」と「𠄎」については『甲骨金文學論叢』初集「釋史」には「𠄎は又頭のある長桿を持つる形であり、𠄎がただ宗廟の中で祝冊を神木に懸けて捧持する形であるのに對して、𠄎は遠く都外に出て使用する意を含むものとみられる⁽²⁵⁾」とある。また「史祭が特に盛大に行なわれるときには、これを（大𠄎）⁽²⁶⁾といった。……（大𠄎）とは文献にしばしば見える（大事）であろう⁽²⁶⁾」と述べる。すなわち白川博士は「𠄎」はもと一つの文字であった「使」「事」をあらわす甲骨文であるとしている。白氷氏は「史」を論じるに際して、「釋史」に通じておらず、この点での記述に誤りが見られる。白氷氏は白川博士の「史」の解釈全般については「據字形分析及甲骨文、金文用例來看、白川靜的意見可備一說⁽²⁷⁾」と述べ、甲

骨文・金文の用例に「史」の義が合致しているところから一説ではあるが注目すべきものとして位置づけている。

白冰氏は「史」「事」「使」は載書の系列文字であり、それらの字義は祭祀に関係していると白川博士の説を要約している。そして『字統』「事」の項の「史は内祭を意味し、事は外祭を意味する」⁽²⁸⁾を引いて「史」「事」の分化した義を説明する。また「使」については『字統』の「使」⁽²⁹⁾の項を引いて「事乃使之初文。事、使即爲奉祝禱之命以使遠爲表示外祭之義的字」⁽³⁰⁾と述べている。「史」が内祭、「使」「事」が外祭に使用される文字であるという白川博士の解釈について「這個意見符合歷史事實、我認爲是正確的」⁽³¹⁾と述べ、賛同の意を表わしている。

またこの論述の最後に載書関連の言・右・召などの50余字を列挙し「這種據系列字來解釋古文字形、字義的方法、能夠總結出文字學的一般規律、有一定的科學性、但對於系列外之字就難以奏效了」⁽³²⁾と述べている。載書系統の文字に貫通した口の義を認めているが、「但對於系列外之字就難以奏效了」の記述は口（口）記号を用いる文字の「口」が必ずしもすべて載書の意ではないことを語っている。

「告」「史」「事」「使」については白川文字学の精髓であり、かつ難解でもある。これらの解釈は『甲骨金文学論叢』初集の「釋史」の記述に詳しい。白冰氏はこれらを『字統』の中からのみ引用して、各字の結論的な部分を引いて、これらが一系の文字で後に意味が分化したことや、その分化した義について述べるわけである。しかしながら「釋史」に見るように白川博士は甲骨文の多くの例を出し「告」「史」「事」「使」の義について考証しており、その考証の過程が原初の字義とそ

の發展を明示し、かつ殷代の他族への宗教的・政治的支配の要諦を語るものである。これらの経緯が読者に伝わらないことは残念である。

白冰氏は白川博士の載書説について次のように述べている。

「白川靜研究古文字另有一種新思路、也是中國學者未曾普遍使用的方法、那就是把古文字分成系列、對系列字進行研究。例如從口之字、口在字中並非全部表示口耳之口的意義、有不少從口的字、口於字中有二義：一爲舉行祈神祭祀之時、盛放祝辭的匣子；一爲舉行盟誓之時、盛放盟誓的匣子。將此匣懸掛於木之小枝即“告”字、“告”爲祈告神靈之意、初義爲告祭。這一系列的字還有右召召古可吾品曰沓曆等。系列字的研究、從整體上、成系統地理解文字、是一種方便的途徑、是一個新思路、但對某些字的分析、結論卻不一定可靠」⁽³³⁾上記を要約する。

白川博士が古文字を系列的に分類して把握し、その系列字に対して研究を進める方法は今までの中国学者にはなかった。例えば、口からなる字は口耳の口の意味以外に多くあり、それらは二義に分かれる。一つは神に祈る祭祀を挙行する際に祝辞を入れる小箱、一つは盟誓の儀を挙行するときに盟書を入れる小箱の義である。この箱は、告字に見られる匣、すなわち神靈に祈る際に木の小枝にかけた匣と同じものである。この系列の文字は右、召、古、可、吾、品、曰、沓、曆など。系列字の研究は新しい考えではあるけれど、いくつかの文字に関して必ずしも従えない。

白冰氏は耳口以外の口を二義に分ち、祝辞を入れる匣の義と盟書を入れる匣の義としている。白川博士は『甲骨金文学論叢』四集「載書關係字説—古代の詛盟祝禱儀禮と文字—」において「史とは祝告盟

誓の祭祀儀禮を意味する語で、外部に使用して祀るときは、使・事といった。その字は𠂔と大體その結構が同じく、𠂔・𠂔に作つて遠行の意を示す釋史、本論叢初集。𠂔は載書の器で、これを捧持する形に象つたものが𠂔である。𠂔は載書を捧持し載行の意がある」と述べている。この文中の「祝告盟誓」とは周代の盟書の義から遡つた殷代の祝禱盟の古代的意味を言うので、白冰氏が祝禱盟を意味する𠂔の義を上記の二義に分けるのは正しくないと思われる。もしそれが正しいとするなら、祝辞系列の字と盟書系列の字を明らかにすべきである。

白冰氏は載書説を「告」、「史」、「使」、「事」字について歴史的事実との符合を認めている。しかしながら、「名」「言」字の「口」は耳口の口とし、白川博士の載書説とは相違した解釈を述べる。また白冰氏は金文中に「口」を含む文字、例えば「商」、「吾」、「右」、「可」、「司」、「唐」、「否」、「啓」、「君」等の「口」は、文字の發展過程の中で他字と形を区別するために付加されたものである、としている。このように白冰氏は「口」を含む文字について、載書の義を有するものと口耳の口の義を有するもの、及び意味を持たない口形の形のみを示す「口」を有する文字の三種の類別があるという考え方をしている。

②『説文新義』「名」の白冰氏の解釈について

白川博士の「名」の解釈は、『説文新義』の下記記述に明白である。「名」の金文の字形は夕に従わず、上部は肉の象形である。…下部の𠂔は載書祝冊の器。肉を薦めて祖廟に告げる意の字形であるが、特にこれを名字の名に用いるのは、命名・告名の儀礼に際してこの儀が行なわれたからである。人は生れて三月にしてはじめて命名がなされ、そ

の名は家廟に報告される。この命名の儀礼によって、生子はその家族あるいは氏族の一員として、公式に登録されるのである。」³⁶白冰氏は、「名」字の上部を肉の象形と見ることに同意している。下部の「𠂔」について白川博士は「載書祝冊の器」とし、命名が「祖靈の前で行なわれる加入式であつた」と解釈している。それに対して白冰氏は名字の下部「𠂔」を口耳の口であると解釈する。その根拠として中国北方農村部の婦人が自分の子供を「娘身上掉下来的肉」「兒女是娘的心頭肉」「肉疙瘩」と呼び、子供の名を「肉肉」と付ける人も多くいるといった風習を例としてあげている。子供の名を直接口で言つて名づけるので、「名」は口・肉をもつて嬰兒を名づける義であると述べる。しかしながらそのような風習をもつて殷周代の字義の根拠とするのはいかかなのであろうか。その風習が殷周代より果たして途切れることなく続いていたのか。そういった点で白冰氏の考証は実証性を欠いている。

また白冰氏は『青銅器銘文研究』第三節《説文新義》的評述に「對名的分析，我雖然舉出一些文獻用例，並結合北方人的稱呼提醒注意，但名之上部字形比較明顯地不從肉，而我又不同意現有的分析，認為白川靜的分析較有新義，儘管有一些旁證，認定名就是從肉，還缺乏更有力的證據，這要等待新的出土資料的證明」と述べている。ここでは先述の北方人の呼称の例をもつても、「名」字の上部が肉ではなないことを述べ、一体白冰氏の真意がどちらなのかわからない。おそらく『青銅器銘文研究』の記述はいくつかの時期の異なった研究論文より成り、後述が白冰の最新の考え方なのであろう。

③ 『説文新義』「言」の白冰氏の解釈について

『説文新義』に「辛は罪を加える意を示す字であるが、これを載書である口の上におくのは盟盟に偽のないことを誓うもので、もし盟盟に不信があれば罪を受けることを意味する意象である。周禮司盟に（有獄訟者、則使之盟詛）とあり、その自己盟盟を言という。司約に（有有訟者、則珥而辟藏、其不信者、服墨刑）と規定しており、辛は墨刑の具に外ならない。すなわち言は獄訟に當たつての自己盟盟の辭をい⁽⁴⁰⁾う」と述べている。

白冰氏は「言」についてのいくつかの解釈を載せている。

『説文解字』三上・直言曰言、論難曰語。從口、辛聲。

鄭樵『通志』・言、從二、從舌。二、古文上字。自舌上而出者、言也。

郭沫若『甲骨文字研究』・言的甲骨文字象以口吹簫『爾雅』云：“大簫謂之言。按：此當爲言之本義。其轉化爲言說之言者、蓋引伸之義也。

『漢語大字典』（縮印本）第1638頁按語說甲骨文「言」像舌從口中伸出形。⁽⁴¹⁾

これらの解釈について白冰氏は言字の上部を舌の形とする論や簫を吹く形とする論を不合理として退ける。

白冰氏は甲骨文字「言」(一期)と「言」(二期)と「言」(三期)から見て「言」字の上部は「辛」字であると述べる。「辛」は辛刀であり、墨刑の刑具を施すものであり、犯人に罪を加える意味であるという。そして下部の口は口耳の口であり、「言」字の本義は訴訟であるべきとする。『後漢書循吏傳「許荆」に「兄弟爭財、互相言訟」とあり、また唐の柳宗元『段太尉逸事狀』に「謹盛怒、召農者曰：我畏段某耶？何敢言我！」あ

るいは『集韻』願韻に「言、訟也」とある。白冰はこれらの例をもつて「言」が訴訟の意味であることの根拠としている。『説文』の「直言曰言」は「言」の引伸義であるとす。また白冰氏は于省吾氏の説を採り、「言」と「音」（甲骨文字）は西周金文中に混用して使われており後に意味が分化したと述べる。
















白川博士は『字統』「言」の項に「言を神にささげ、その器中に神意の反応があらわれることを音という。神意はその（音なひ）によって示される」と述べる。白冰は口を口耳の口と見、白川博士が載書の器とされるところに両者の見解は明確な異なりを見せる。その見解の差により、「音」字の解釈もまた相違する。




④ 『説文新義』「客」の白冰の解釈について

白冰氏は「客」について『説文新義』の次の文を引用している。「客は各に従う。各は聲符でなく、祝告して招くのに對して、神靈の降下することをいう。召に對して各という。その神靈を廟中に迎えるものを客、その誠敬の意を恣・恪という。二王三恪とはそのような客神を意味し、先王朝の祖靈を客神として請ずるのである。詩の周頌有客・有瞽・振鷺の諸篇が、殷の祖神が周廟に來格する儀禮を歌うものであるが、……金文では來格の義に各・格・嚳・客の字を用い、もと神靈の來格をいう。賓客は本族外の人をいう語であるから、金文では王孫遣者鐘（用匱以喜、用樂嘉賓父兄、及我朋友）・姑馮句鐘（以樂賓客、及我父兄）のように、同胞のものと區別している」⁽⁴²⁾

これに対して白冰は次のような見解を述べる。「客」字の意義與各密切相關、各字甲骨文字（二期）《前》五、二四六、作𠄎（三


期《甲》二四三七），金文休盤銘作，金文與甲骨文形義俱同。各









字上部從夂，下部像古人穴居的居所，整個字形像舉足從外向穴居住所走來，來到之義。⁴⁵すなわち「客」は「各」と密接な相関があるとし、「各」字の上部「夂」を足と解し、下部の「」を豎穴式住居の図形と解した。結果として、穴居に人が入ってくることを各の字義としたのである。「各」字の甲骨文には「」（一期合集五四三九）があり、徐中舒は『甲骨文字典』の中で「各」を「從從（夂）或作」；並象古之居穴，以足向居穴會來格之意。⁴⁶と述べており、上記の白冰氏の解釈はこれによったものである。次に「客」は「各」に「」を加えたものであり、戴家祥主編の『金文大字典』の「客當從從各各亦聲。字屬形聲兼會意」を根拠とし、また一方で「客」は金文で（仲義父鼎）、（陳喜壺）の字形より見て「凡不是自家入、從外面來的人都可以稱之爲客人」⁴⁷と述べる。すなわち甲骨文の「客」字中の「（人）」と「（夂）」及び「」「」の字形の会意を穴居にやってきた外来の人と見、それを客の義としたのである。

白冰氏と白川博士との意見の違いは「」の解釈の違いであろう。白冰氏は「客」字に関して白川博士の載書説に同意していない。それに対して白川博士は「」載書説を前提として「客」の字義を述べる。白川博士は「各」について「夂は上より夂（足）が降りてくる形で、神靈の下降することを示し、口は、祝祷を収める器の形で、祝詞で祈ることをあらわす。祈りによって神靈が降り来たること、すなわち『各（きた）る』が字の原義⁴⁸」と述べている。「客」については「客とは異族神をいう語である」⁴⁹とあるように、その初義は異族の客神であつ


たとしている。

⑤ 『説文新義』「魯」⁵⁰の白冰の解釈について

白川静『説文新義』「魯」の項に「・曰は祝告の器である。字は多く祝嘏の語に用いるが、魚に従うのは、おそらく嘉魚を以て神に侑薦する意であろう。…また金文では、伊姑鼎・井鼎・適段などの器銘に、漁して魚を祖廟に薦め、あるいは祖祭の用として賜與されることを記している。魯鈍の義はおそらく假借義であろう」⁵¹と述べている。

「魯」字は甲骨文ではに作り、金文では、に作る。白冰氏は「魯」字の下部のを祝告の器とする白川説には与せず、「魯」字大概就是從魚分化出來的、後來增、或口中又增點、可能是區別其他字的符號、既非聲符、亦非形符」⁵²と述べる。すなわち金文中に「」を含む文字、例えば商、吾、右、可、司、唐、否、啓、君等の「」は、文字の發展過程の中で他字と形を区別するために付加されたものである。唐蘭も「蓋古文字繁變、往往增口無義」と述べており、この意見は憶測ではなく根拠があり、重視しなければならないとしている。

② 『字統』「鳴」「唯」「雖」⁵³の白冰氏の解釈について

鳥の象形字に「鳥」「隹」があるが『字統』「隹」の項に「鳥は鳥星のように特定の神話化されたものを象形的にしるし、他の鳥はすべてこの形（隹：筆者書く）にかき、尾の長短によるものではない。卜文・金文に発語の隹に用い、その字はのちに唯・惟・維とかかれる」⁵⁴。また「字統」「鳴」の項に「会意。口と鳥に従う。口は、祝祷を収める器。神に祈り、鳥の様子によって占う鳥占いのしかたを示す字。

……その造字法は唯と同様であり、唯は神意の応諾を示す字⁽³⁵⁾とあり、白冰氏はこの二つの文章を例に引いている。白冰氏は「鳴」「唯」の「口」について「甲骨文口字無用作口耳之口的例子⁽³⁶⁾」とした上で、白川博士の「㇀、祝祷を収める器」とする解釈を新しい認識だと評価する。また白川博士のいう鳥占いの古代風俗を比較的信じることができると述べている。

「雖」について白川博士は「会意 口と虫と佳に従う。口は㇀、祝祷を収める器。虫はそれを侵す呪虫。佳は鳥トイをいう。祝祷して鳥トイをし、その結果示される神意は唯。唯は〈しかり〉であり、〈あり〉という肯定であるが、その唯に虫がつくのは、邪霊がその神意を害し、神意の奉行をさまたげる意である。唯は神意の承認を示すが、それを害する邪霊があれば、その神意の実行は保留すべきで、それで雖は逆接態になる⁽³⁷⁾」と述べる。白冰氏は「雖」の白川博士の解釈に対して、次のように考釈する。

『説文』一三上では「雖 似蜥蜴而大。從虫、唯聲」とあるが、唯声は疑わしく、「雖」を虫名に用いた例がない。白冰氏は金文の「雖」の字形より見て、「從佳、虽聲之字⁽³⁸⁾」であるという。したがって白川博士が「雖」を会意字とするのは受け入れがたいとしている。

「雖」の金文にはふたつの用法がある。一つは語氣詞（發語詞）であり、「秦公鐘」の「余雖小子」に見られる。この「雖」は「唯」と読むべきである。（※語氣詞（發語詞）とは古代漢語で使われる品詞で、文の最初や話題転換の際に用いる。）もう一つは逆接連詞（逆説を意味する接続詞）で「……といえども」を意味する「雖」の用法である。

白冰氏は「語氣詞、逆接連詞與蜥蜴或、祝禱鳥占、之間毫無聯系、爲假借用法。由於後世多用於語氣詞或逆接連詞、而本義晦⁽³⁹⁾」と述べている。すなわち語氣詞、逆接連詞としての「雖」は鳥占いとは関係がなく、仮借の用法である。「雖」は後世多く語氣詞、逆接連詞として使われ、それ故に本義は何であるかはいまだ不明である。一般的にみて文字の本義と仮借義とは意味上の関連はない、としている。

(3) 神梯関連の文字（「阜」「𠂔」）について

『字統』「阜」の項に「字はもと𠂔の形に作り、神梯の象。神が天に陟降するときに用いる梯で、この部に属する字はもと神事に関するものが多い⁽⁴⁰⁾」とある。白冰氏は「阜」について従来説を挙げている。『説文』「大陸、山無石者」、「爾雅」釋地「大陸曰阜」、「釋名」釋山「土山曰阜」。徐中舒「古代穴居、於豎穴側壁挖有脚窩以便出入登降、甲骨文正象脚窩之形⁽⁴¹⁾」など。白冰氏は阜の神梯説が正しいとするなら、まず阜からなる諸字（部首𠂔の字）がその道理に合っているかを分析するべきだとしている。

「隕」は『字統』に「声符は員。員は円鼎。員に円くして転ずるもの意がある。隕とは隕石をいう。その字が神梯の形である自に従うのは、隕石の落下したところを、聖所とする考え方があったからであろう⁽⁴²⁾」。白冰氏は「隕」について、『易』の「有隕自天」や『左傳』莊公七年の「四月辛卯、夜、恆星不見。夜中、星隕如雨」の例を引き、「隕」は「隕石」の意としている。また「若解阜爲土山、隕（碩）石義則不通。白川靜的意見似當可從⁽⁴³⁾」と述べ、この点では白川博士とは同意見

である。

「陟」は「字統」に「自と歩(歩)とに従う。自は神靈の上下するときに用いる神梯。陟降とは神靈の陟降往来することをいう字である」⁽⁶³⁾とある。白冰氏は「説文」一四下「陟、登也。從阜從止、金文の「陟」字⁽⁶⁴⁾」(沈子篋銘)〔金文編〕卷14、2323)、「降」字⁽⁶⁵⁾ (天亡篋銘)〔金文編〕卷14、2325)を字義の例として挙げている。また羅振玉の『増訂殷墟書契考釋』「從阜、示山陵形、從止、象二足由下而上。此字之意但示二足上行、不復別左右足」、李孝定『甲骨文字集釋』「或從歩、或從止、但象其上昇之形」⁽⁶⁶⁾を挙げ、これらは低い処から上に登ることをいい、「降」と相対的な意味であるとしている。そして白冰氏は『詩經』周頌閔予小子の「念茲皇祖、陟降庭止」の例を挙げ、「庭即廷、爲迎神之所」と解釈している。また「陟、降原爲神靈上下往來之字、後來陟用作登山、降用爲下山之義」⁽⁶⁷⁾と述べ、「陟」「降」字についても、神梯説との符合を認めている。

「隊」は「字統」に「会意 旧字は隊に作り、神梯の象である自と、犠牲として供える牲獸の豕の形に従う。豕は殺されて耳を垂れている犬牲の象で、神梯の前にその牲をおくのは、すなわち神靈の降り立たす墜(地)を意味する」⁽⁶⁸⁾とある。『説文』一四下に「隊、從高隊也」とあり、『段注』「隊、墜、正俗字。古書多作隊」から見れば、「墜」もまた「隊」と同義である。「墜」は「字統」に「隊と土とに従う。隊は神梯の前に犬牲をおく形で、そこは神が神梯より降り立つところ、すなわち墜(地)を意味する。土は社、そこに土主を祀る」⁽⁶⁹⁾とある。この白川博士の解釈に対して、白冰氏は「一種新思路、應該重視」⁽⁷⁰⁾と

述べており、その新しい考え方に同意を示している。

「阜」字系列の「隕」「陟」「降」「隊」「墜」等を考察した後に、白冰氏は「阜」字系列に統貫する神梯説について次のように述べている。「我認爲白川靜所論天梯諸字、與中國學者的看法不完全相同、儘管有一些證據、也不好認定阜字就是神靈陟降往來的神梯就是正確的、尙缺乏更爲有力的證據、這要等待出土資料的證明。但白川靜先生的分析不是沒有意義的、他以文獻作爲依據、大膽地進行推測、想像力極爲豐富、啓發了我們的思維、開闢了一條新的思路、給我們許多啓示」⁽⁷¹⁾上記の文を要約する。白川静先生の神梯説は、中国学者の見方とは全く異なるものである。いくつかの証拠があるとしても阜字の神梯説が直ちに首肯しうるものではなく、なお出土資料の証明を待たねばならない。しかしながら白川先生の分析は意義がないわけではなく、彼は文献を根拠にして、大胆に推測し、我々の思惟を啓発し、新しい解釈を提示し、我々に多くの啓示を与えた。

白冰氏は白川博士の神梯説についてはおおむね肯定はしているが、部分的には否定している。そしてその否定の根拠として「出土資料」を求めている。しかし「阜」字に見る神梯の真偽を出土物に求めるのは不適切であると思われる。なぜなら神梯とは神の往来する梯であるから具体的事物としてあるべきものではなく、また神梯が祭祀における用具としてあったかどうかは現在の我々にとって不可知だからである。白冰氏のこの考え方に対しては、甲骨文・金文の字解を求める場合、いったい何を根拠とするのかといった研究全体に関わる定義について考えてみる必要があるように思われる。『字統』「字形の意味」⁽⁷²⁾の

中で白川博士は文字原義の考証について数箇所語っている。「文字を古代学的な立場から理解しようとする試み」「資料的には、甲骨文・金文をこそ信ずべきであり……」「字形の理解には、字の系列的な把握が必要であること」「文字は一点一画にみな要素としての意味があり……」等々である。甲骨文・金文と古代の歴史の整合性、字の系列的理解による字義の貫通、文字の構成要素にはすべて造字上の意味があることを主眼とされている。そのほかに甲骨文・金文また四書五経などの文献解釈との整合性も必要であろう。考古学的証拠がなければ文字の原義が定立できない、というのは文字の原義解釈については当たらない。⁽⁷²⁾

(4) 『金文通釋』における文字解釈について

① 『金文通釋』「易」の白冰氏の解釈について

『説文』には「易」と「易」字がある。白川博士は「易」と「易」は「声義において関係があるものと思われる」としている。「易」は『説文』九下で「蜥易、蝦蜓、守宮也」とあり、とかげ・やもり・いもりの象形である。「易」は『説文』九下に「開也。从日一勿。一曰、飛揚。一曰、長也。一曰、彊者衆兒」とあり、太陽の性質・様相の意味であろう。宋末元初の戴侗の『六書故』には「易明爲易、会暗爲会、天地之道、会易而已矣。易从日、会从云、因象以著義、会易之義、居可識矣」と述べられており、易は陰陽の義とした。これに対して白川博士は「易」字について「明らかに玉を奉ずる象である。従がって下部の𠂔はその臺座の形、また下部に彡を加えるものは、その玉光を示し、

勿字ではない」とする。また白川博士は「金文の陽・揚の字形から見、日は玉形、字が玉光を示すものであることは、ついにこれを闕くものがなかった」と述べている。白冰氏は白川博士が「易」に連繫するとする「揚」の字を挙げ、「揚、字金文𠂔（貉子貞）正同、易、令鼎作𠂔形、揚作父辛簋、揚鼎作𠂔或𠂔、象人執玉或執璧揚舉之形、也有於日上加玉的、如𠂔（召伯簋）、或於日下加玉的、如𠂔（頌鼎）𠂔（頌壺）、字形變化較大」と多くの「揚」字の例を示し、白川博士の説をそのまま翻訳している。そして白川説を一つの新しい見方であると位置づけている。また白冰氏は師張振林氏の「殷商至两周中、下無斜點。手不能奉日、玉不該在日上」を引用して、「易」と「揚」が連繫する文字でないことを述べ、白川博士の意見は情理に合わないとする。また「易」と「揚」の二字はさらに調べる必要があるとも述べている。

② 『金文通釋』五四「德方鼎」の「禴」の白冰氏の解釈について

白川博士は「德方鼎」の「禴」の字について「禴」と解釈されている。この金文文字について同じ文字が『金文通釋』𠂔尊銘文に「福」とされていると白冰氏は述べる。ところが『金文通釋』𠂔尊銘文を調べてみるとこの字は「禴」であり、明らかに字形が異なっている。白冰氏は「德方鼎」の「禴」字を「禴」と書き、両者の字が同じ文字としている。また白川博士は「德方鼎」を解説する中で、郭沫若がこの字を「福」字としており、馬承源は「禴」であると解説している。⁽⁷³⁾ところが白冰氏は馬承源のことも記していない。その代わりに自分の師張振林氏が烏邦夫の解釈を採って「禴」が福字ではないとする説を載

せている。これらから見ると白氷氏の解説は記述に正確さを欠き、白氷氏自身の主観で原文の内容が置き換えられていることがわかる。そしてまた「禘」字が両説のどちらなのかという白氷氏の結論または推論の記述がない。中国の読者がこれを読めば、おそらく誤解を招くであろう。

③『金文通釋』「禘」の白氷氏の解釈について

白川博士は「大孟鼎」の「□□、用牲啻周王□武王成王」について「啻」を「禘」の初文とみなした上で「上下二字不明。告捷獻馘に當つて三王の禘祀が行なわれたのである。禘には牲を用いた」と述べる。続いて『刺鼎』の「唯五月王才初、辰才丁卯、王啻、用牡于大室、啻邵王」の「禘は禘禘あるいは時祭の一と解されているが必ずしもそうではなく、國に大事・大慶あるときに行なわれたのであろう。本器は獻馘の際の例である」と述べる。この記述について白氷氏は次のように述べている。「白川靜説…“用牲啻周王、武王、成王、啻就是獻馘告捷之時行三壬(王の誤植か?)之禘祀、禘祀也有用牲之事。如刺鼎…唯五月王才□、辰才丁卯、王禘、用牲於大室、禘邵王。、禘爲禘禘或釋爲一種時祭、即國家因大事舉行隆重慶典時的一種祭禮。”(波線筆者記す。この波線部分は翻訳間違いで、逆の意味になっている。)白氷氏はここから白川博士の説として、禘と啻が同義の字であること、禘祀とは「國家因大事舉行隆重慶典時的一種祭禮」であることを挙げている。

白氷氏は『甲骨文字典』(徐中舒著)、『金文編』(容庚著)中の「帝」「禘」「啻」三字の例を挙げ、甲骨文には「禘」字はなく「帝」「禘」

はもと「帝」一字であり、金文になって二つの字に分かれると解釈する。金文の「禘」には「示」がなく「啻」を用いる。「帝」「禘」「諦」「啻」はもと一字であり、その初文は「帝」であるとしている。したがって白川博士が禘祀を「國に大事・大慶あるときに行なわれた」一種の祭礼と解釈するのは引伸義であると白氷氏は言う。ここで問題になるのは白川博士と白氷氏が「帝」「禘」をどの甲骨文にあてたかということである。白川博士は「帝」の甲骨文を「𠩺」「𠩺」とし「禘」を「𠩺」に当てている。「帝は上帝を祀る大きな祭卓の形。これによって上帝を祀ることを禘という。ト文の字形は、動詞としての禘のときには、帝字の中央に横長の方形、あるいは円束を加える。金文では帝字の下に、祝禱の器である𠩺をおく。いずれも帝が上帝を示す名詞であるのに対して、禘はその祭儀であり、動詞的な字であることを示す。」⁽⁸⁴⁾それに対し白氷氏は「帝」の甲骨文を「𠩺」「𠩺」に当てており、「禘」字は甲骨文にはなかったとしている。すなわち「帝」「禘」の名詞と動詞の用法に区別があったことを認知していないのである。白氷氏が「帝」の甲骨文を参照した徐中舒の『甲骨文字典』をみると、なるほど「帝」の項には「𠩺」「𠩺」のみが記載されている。しかしながら同じ『甲骨文字典』の「禘」の項に「𠩺」の記載がある。そこには「𠩺」が使われた「𠩺ト𠩺𠩺 𠩺 干 𠩺(丙辰卜貞禘于岳)」(遺846)⁽⁸⁷⁾の例も載せられている。白氷氏はこのことに全く触れておらず、少なくとも「𠩺」を記載した上で、彼の解釈を述べる必要があると思われる。上記の文例をみても筆者には「禘」が甲骨文に存したことは間違いないと思われる。

おわりに

上述の白冰氏の白川博士及び中国の文字学者に対する評価をみると、白冰氏の甲骨文字・金文の研究方法は従来の文字学者の解釈を通じて自身が正しいと思える説を選択することを主とするものであろう。白冰氏の字義解釈の顕著な例は白川博士の甲骨文の口（𠂔）の載書説についての評価である。白冰氏は載書説を「告」「史」「使」「事」字について歴史的事実との符合を認め新しい見方であると大いに評価している。しかしながら、「名」「言」字の口は耳口の口とし、金文中に口を含む文字、例えば「商」、「吾」、「右」、「可」、「司」、「唐」、「否」、「啓」、「君」等の「口」は、文字の発展過程の中で他字と形を区別するために付加されたものである、としている。このように白冰氏は「口」を含む文字について、載書の義を有するものと口耳の口の義を有するもの、及び意味を持たない口形の形のみを示す口を有する文字の三種の類別があるという考え方をしている。

白冰氏の経歴を見ると、日本に留学に来たのは一年一ヶ月であり、日本語の能力にやや難があることを認めざるを得ない。例えば、「白川静説…用牲啻周王、武王、成王、啻就是獻馘告捷之時行三王（王の誤植か？）之禘祀、禘祀也有用牲之事。如刺鼎…唯五月王才口辰才丁卯 王禘、用牲於大室、禘邵王。禘爲禘禘、或釋爲一種時祭即國家因大事舉行隆重慶典時的一種祭禮。」⁽⁸⁾（波線筆者記す。この波線部分は『金文通釋』の本文では「時祭の一と解されているがかならずしもそうではなく」となっており、翻訳間違いであり逆の意味になっ

ている。）また『字統』「白」の項に「軍が出征するときに奉ずる祭肉の形で…」とあるのを「象軍隊出征時攜帶的祭肉之形」とあり、また『字統』「鳴」の項に「神に祈り、鳥のようすによって占う鳥占のしかたを示す字」とあるのを「祈求神靈時持鳥占卜以示鳥占的方法」とあり誤訳である。このように誤訳が散見され、また日本語を中国語に置き換える際にややニュアンスに違和感が感じられる場合もたびたびある。これらから考えると、白川文字学がやや偏向して中国に伝わっていないか危惧せざるを得ない。また白冰氏が白川文字学を解釈するにあたり、『金文通釋』『金文の世界』『说文新義』『字統』のみの文献の引用で𠂔系列の文字群を論じているが、やや不足の感は否めない。周知のように𠂔の系列文字「史」「事」「使」は『甲骨金文学論叢』の「釋史」「載書關係字説」に詳しい。それらは甲骨文字・金文・歴史など多方面から論じられており、部分解釈だけではその真意が十分伝わっているとは言い難い。

白川文字学を中国に伝えるには、日本語と中国語の双方の能力と正確な字義解釈が必要とされる。更にいえば難解であるがゆえに、今後白川文字学を中国に正確に伝える仕事は意義あるものとして位置づけられるであろう。

註

(1) 上海：學林出版社（2007.6）

(2) 白冰『青銅器銘文研究—白川静金文学著作的成就與疏失』（學林出版社2007.6）p. 1

- (3) 同上 p. 1 ~ 2
 (4) 同上 p. 2
 (5) 同上 p. 8 ~ 9
 (6) 同上 p. 9 筆者訳
 (7) 同上 p. 9 ~ 11
 (8) 同上 p. 13 ~ 14
 (9) 同上 p. 14 ~ 15
 (10) 同上 p. 15 ~ 16
 (11) 同上 p. 16
 (12) 同上 p. 19 ~ 54
 (13) 同上 p. 54 ~ 55
 (14) 同上 p. 57
 (15) 同上 p. 136 ~ 137
 (16) 同上 p. 141 ~ 142
 (17) 同上 p. 143 ~ 144
 (18) 同上 p. 144 ~ 147
 (19) 同上 p. 144 ~ 147
 (20) 同上 p. 144 ~ 145
 (21) 白川静『字統』(平凡社1984. 8) p. 320
 同上
 (22) 同上
 (23) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 145
 (24) 以上の記述は同上 p. 146
 (25) 『甲骨金文學論叢』初集「釋史」 p. 27
 (26) 同上 p. 29
 (27) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 146
 (28) 『字統』 p. 381
 (29) 同上 p. 366
 (30) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 147
 (31) 同上 p. 147
 (32) 同上 p. 147

- (33) 同上 p. 295
 (34) 『甲骨金文學論叢』四集「載書關係字說—古代の詛盟祝禱儀禮と文字—」(白川静著作集別卷「甲骨金文學論叢」上 平凡社2008. 6) p. 393
 (35) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 108 ~ 110
 (36) 白川静『說文新義』卷二(五典書院 昭和44. 10) p. 262
 (37) 同上卷二 p. 263
 (38) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 137
 (39) 同上 p. 113 ~ 114
 (40) 『說文新義』卷三上 p. 465 ~ 466
 (41) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 113
 (42) 『字統』 p. 268 ~ 269
 (43) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 127 ~ 129
 (44) 『說文新義』卷七 p. 1515
 (45) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 128
 (46) 徐中舒『甲骨文字典』(四川辭書出版社1989. 5) p. 97
 (47) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 128
 (48) 白川静『字統』平凡社(1984. 8) p. 103
 (49) 『說文新義』卷七下 p. 1515
 (50) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 117 ~ 118
 (51) 『說文新義』卷四上 p. 694
 (52) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 117
 (53) 同上 p. 198 ~ 199
 (54) 『字統』 p. 484
 (55) 同上 p. 819
 (56) 『青銅器銘文研究—白川静金文學著作の成就與疏失』 p. 198
 (57) 『字統』 p. 487

- (58) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 199
- (59) 『字統』 p. 739
- (60) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 205
- (61) 『字統』 p. 34
- (62) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 206
- (63) 『字統』 p. 609
- (64) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 206
- (65) 同上 p. 207
- (66) 『字統』 p. 567
- (67) 同上 p. 612
- (68) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 208
- (69) 同上 p. 211
- (70) 『字統』 「字統の編集について」 p. 15
- (71) 白川博士は『漢字の世界2』（平凡社東洋文庫 昭和51. 3） p. 90で「卜文・金文において、その神梯を示すものは、である。伊勢の内宮にも、円柱に足かけを刻みこんだこの形の神梯があるということである」と述べている。
- (72) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 26
- (73) 『字統』 p. 49
- (74) 『説文新義』 卷九下 p. 1598
- (75) 『金文通釋』 5（白川靜著作集 別卷 平凡社平成17. 4） p. 106
- (76) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 26～27
- (77) 『金文通釋』 1下（白川靜著作集 別卷） p. 566～573
- (78) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 28～29
- (79) 『金文通釋』 1下（白川靜著作集 別卷） p. 568～569
- (80) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 29～30
- (81) 『金文通釋』 1下（白川靜著作集 別卷） p. 704
- (82) 同上
- (83) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 29～30
- (84) 『字統』 p. 619
- (85) 『甲骨文字典』 p. 7
- (86) 同上 p. 23
- (87) 同上 p. 24
- (88) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 29～30
- (89) 『字統』 p. 562
- (90) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 170
- (91) 『字統』 p. 819
- (92) 『青銅器銘文研究—白川靜金文學著作的成就與疏失』 p. 198